

インド語インド文学

◇教員◇

教授：梶原三恵子

助教：高橋健二

◇学生◇

学部：2名、修士課程：5名、博士課程：14名（大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数）

（１）はじめに

本専修課程では、サンスクリット語などの古典語を中心に、インド亜大陸の言語と文化を総合的に研究しています。インド文化は紀元前二千年紀から現代までの三千年にわたって豊かな文献資料を伝え、ヒンドゥー教や仏教を介して、南アジアから東南アジア、および日本を含む東アジアに至るまで、大きな影響を及ぼしてきました。インド語インド文学の対象となる時代も領域も広大ですが、本専修では古代（紀元前十二世紀頃）から古典期（紀元数世紀頃）を中心に研究しています。

（２）インド語インド文学とはなにか

専修名はインド語インド文学ですが、「インド語」という単独の言語はありません。本専修では、インド亜大陸で用いられている、あるいは用いられてきた諸言語をインド語（インド諸語、**Indian languages**）と総称しています。サンスクリット語をはじめとするインド・アーリア系諸語は、ヨーロッパの多くの言語と同一の起源をもち、インドからヨーロッパに至る地域の諸言語を比較する印欧比較言語学にとっての一大資料でもあります。一方、タミル語をはじめとするドラヴィダ系言語などの非インド・アーリア系諸語も、インドの言語文化の大きな一角を占めています。

「インド文学」も、物語や詩歌などの狭義の文学に限りません。本専修では、「言語によって伝えられているインド文化」の総体をインド文学（**Indian literature**）と呼んでいます。過去数年間の教員および学生の研究テーマには、次のように、さまざまなジャンルのものがあります。

古代インドの家庭儀礼の成立と発達
ウパニシャッドと初期仏典の接点
古代ジャイナ教の在家信者の生活規範
パーニニ文法学とヴェーダ聖典
サンスクリット説話集『ブリハットカター』の成立史
大叙事詩『マハーバーラタ』の語りの構造
タミル恋愛文学
タミル二大叙事詩の相互関係
鳥の形の祭火壇を作るヴェーダ祭式
伝統インド医学（アーユルヴェーダ）
古代インドの葬礼
インド最古の文献『リグヴェーダ』の詩論
古代インドの占星術理論
古典インド演劇論
『マヌ法典』における訴訟主題
カシミール王統記 など。

（３）進学したら

本専修の授業では、サンスクリット語、パーリ語をはじめとする中期インド諸語、タミル語など、古典語を中心にインド諸語の文法を学び、原典を講読します。このうちサンスクリット語は必修です。サンスクリット語の文法規則は、紀元前から三千年にわたって基本的な部分は変わらないので、いったん初級文法を学べば、さまざまなジャンルの文献の研究に進めます。ジャイナ教文献や仏教文献に必要な中期インド諸語、ヒンディー語などの近現代インド・アーリア諸語は、サンスクリット語の流れをくんでいます。ドラヴィダ系のタミル語など非インド・アーリア諸語も、語彙などにサンスクリット語の影響を受けています。サンスクリット語を学ぶことで、広い時代と分野のインドの言語と文学に扉が開かれます。

インド哲学、仏教学、言語学、西洋古典学ほか、他専修の授業も積極的に受講することが推奨されます。原典講読の予習は時間のかかるものですが、うまく時間を管理すれば、教員免許の取得や就職活動などとも両立できます。

(4) 教員と授業の紹介

梶原教授はサンスクリット語学文学が専門です。ここ数年の主な関心は、紀元前インドのいわゆるバラモン教（ヴェーダの宗教）の家庭祭礼の研究を通じて、古代インド社会文化史を解明することにあります。高橋助教はサンスクリット語学文学が専門で、前2世紀から紀元4世紀に成立したインド二大叙事詩のひとつ『マハーバーラタ』を研究しています。このほか毎年、数名の非常勤講師を学外からお招きし、さまざまな専門領域の講義を担当していただいています。もっとも、教員の専門研究が講義・演習にそのまま反映されるわけではなく、狭義の専門分野を越えて、インド古典のさまざまな領域の講義や演習が行われることが少なくありません。授業の詳細については文学部便覧、シラバス、研究室ホームページをご参照ください。

(5) むすび

インドの言語と文化には三千年以上の歴史があります。その間には当然、変革と発展がくりかえされてきましたが、インドの面白さは、古代の言語と文化が、ときに形を変えながらも長い歴史を超えて生き残り、近現代文化のそこそこに継承されているところにあります。

「サンスクリット語は、その古さはどうであろうとも、驚嘆すべき構造をもっている。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そのいずれにもまして洗練されている。」

ウィリアム・ジョーンズ (1746－1794)

原典の一語一語をじっくりと噛みしめながら取り組むうちに、インド語学習と原典講読のおもしろさはもちろん、学問の楽しみをも味わうことができるようになっていただければと思います。大学時代に堅実な学問を経験することは、きっとみなさんの人生を実り豊かにしてくれるでしょう。

研究室HP <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/indlit/index.html>